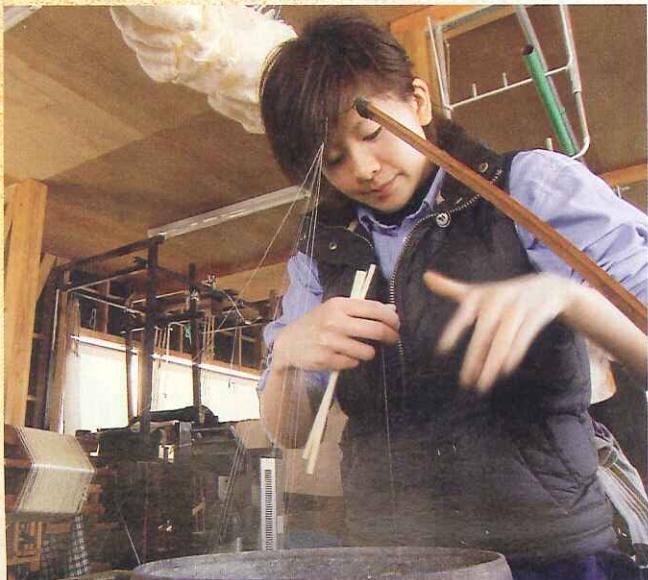


日本の伝統・文化を継承する若者たち

朝のへる 門

Door to Tomorrow



Hisako Yamagishi

1988年山形県米沢市で代々織物業を営む家に生まれる。短大卒業後、染織家になることを決意。現在は米沢市赤崩にある工房で、兄と共に父の教えを受けながら修業に励む。



草木染め(くさきぞめ)

天然の植物の花、葉、根などを原料に使い染め上げる技法。日本に古代から伝わる草木染めだが、米沢では江戸時代初期、米沢藩に仕えた老中直江兼続により紅花などの栽培が選奨されたことから盛んになった。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する
映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
 WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットで
アットホーム明日への扉 検索

TV番組
ディスカバリー・チャンネル(CS)
冠番組
「アットホーム presents 明日への扇」放映中
今週金曜日 22:53 - 23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!  **最新号のご案内** 8月22日公開予定

No.048／截金師(きりがねし) 中村 華乃 氏

草木染織家

紡ぎ、染め、織る。
全てに、心を込める。

山岸「父から、成人式で着る振袖を染めてみないかと勧められたんです。父の助けを得ながら、終始手探りの作業でしたが、仕上がるころには物づくりの喜びを感じていました」

絶がある。直刀で身を守る。また、食事の用意をする。この系で、反物を織り上げる、昔ながらの染織り。その魅力は、歳月とともに深みを増していく色合いだ。

山岸久子さんは、清流を包むように原野が広がる市内の山里で、技の継承にいそしむ若き職人。父の幸一さんは弟子入りを決めた理由は、次のことなことだった。

染めの作業は、糸を木桶に張った染料に何度もくぐらせた後、流水に浸す。氷のような水を相手に素手での作業は見るからに辛そうだが、これは水中の酸素に糸をさらすことで発色を促す大切な仕上げ。しかも、染めはこれまで終わらない。1年間寝かせ、来年、色合いに育ててようやく手機^{てぼた}の作業に入ることができる。

MOVIE MORE!!

日頃、師匠から「物と無言で対話しながら仕事を進めれば、物から何かを訴えてくる。その瞬間を見逃すな」といわれている。全神経を張り詰めながらその瞬間を求めて、若き職人は黙々と糸を紡ぎ、染め、手機を動かす。明日への扉を開け、また一步、夢に近づく。

*2013年4月取材。掲載内容は取材当時のものです。

伝統の草木染織に全力で挑む彼女の姿を動画で詳しくご紹介します。ぜひご覧ください。

山形県米沢市。城下町として知られるこの地に、古くから伝わる草木染織がある。草木で染めたさまざまな色の糸で、又物を織り上げる、昔ながら

カイコの飼の桑の葉を栽培する。そして、自ら育てたカイコの繭から糸を取り、一反に3000個もの繭が必要となる。この繭くなるような作業。

手織りにこだわる理由は?

手織りにこだわる理由は?